

電子ジャーナルへのリモートアクセス環境構築とそのアクセスログ分析*

木村雄二(学籍番号 200821649)

研究指導教員: 歳森敦

1. 序論

学術機関ではネット上の電子リソースから、信頼出来得る情報資源を探し出す“情報探索行動”が必要不可欠である。筑波大学附属図書館では大学構成員の情報探索行動を支援するために、リンクリゾルバーSFX と横断検索システム MetaLib の導入を行っている。

本研究では、1) SFX の利用ログの分析を行い、利用率等の把握を行った。2) SFX を使わない経路での利用動向や支援ツールを利用した一連の情報探索行動などを取得するために、リモートアクセス環境を構築し、そのアクセスログを用いて、情報探索支援ツールの利用状況などを求めた。3) EZproxy 利用者を対象とした Web ベースの質問紙調査を行い、支援ツールの満足度を明らかにした。4) これらを踏まえて、支援ツールの有効性・必要性の評価を行った。

2. 先行研究および評価手法

アクセスログ分析及び電子図書館サービスの評価に関する先行研究を行った。またリモートアクセスシステム及び支援ツールの評価を行うための指標を策定するために、COUNTER Project などの電子図書館サービスの評価指標に関する研究の調査を行った。

*“Construction of Remote Access Environment to Electronic Journals and its Access Log Analysis” by Yuji Kimura

3. SFX のログ分析

支援ツールの評価を行うための予備調査として、2008 年度の SFX 利用ログの分析を行い、その利用傾向を明らかにした。年間リクエスト数及びクリック数では、医学、中央図書館利用者、化学からの利用が多くあった。また附属図書館内から電子資源にアクセスする行動が依然として多いことが分かった。利用クリック数上位 10 位で全体の 78.2%を占めており特定分野のサブドメインからの利用が多い傾向にあった。

利用の中でも特にフルテキスト論文が存在するものに注目すると、“フルテキストの入手率”は 69%と比較的高かったものの、総リクエスト中のフルテキストがある割合である“フルテキストの出現率”は 35.7%と低い結果が出た。SFX がフルテキストへの到達を支援しているのかを示す指標である出現率に問題があると考えられる。

4. EZproxy のログ分析と質問紙調査

EZproxy によるリモートアクセス環境の構築を行い、そのアクセスログを分析することで、支援ツールの利用状況を含む筑波大学構成員の情報探索行動を明らかにした。分析対象としたのは、総アクセス 26,335 件、総セッション数 3,230 件、総利用者数 192 名の利用ログである。

ログから確認出来た EJ/DB の主要なアクセス経路は、1.論文系 EJ/DB の利用(2,840 セッション)、2.情報系 DB の利用(366 セッション)、3.MetaLib の利用(50 セッション)であった。

複数のリソースを利用している人および MetaLib 利用者は 98 名おり、全体の 51.0%を占めており、横断検索に対する潜在的なニーズは

大きいと考えられる。ところがこの中で **MetaLib** を利用している利用者は 18 名(18.4%), セッション数 50(1.5%)に過ぎず, 複数のリソースから情報を探索しているにもかかわらず, 大半の人が横断検索ツールである **Metilib** を使われていないことが示された。また **MetaLib** を利用した経路でフルテキストの入手が出来ているセッションはなかった。

SFX がどのように使われているのかを調査するために, その利用経路(移動元・移動先・リクエスト数)について分析を行った。**SFX** の利用者は 26 名(13.5%), 57 セッション(1.7%)あった。**SFX** の移動元として多かったのは順に, **Google Scholar** 19 回, **CiNii** 17 回, **PubMed** 8 回で, 無料 **DB** が中心であった。移動先では大学が契約している電子ジャーナルリストなど所在情報が 34 件と多く, それに対して **EJ/DB** 自体へのアクセスは 13 件と少なく, またフルテキストへと直接到達しているセッションもなかった。今回, **SFX** が利用されたケースはおそらくフルテキストが存在せず, 入手のためにその印刷体の所蔵を確認する目的で **SFX** を使用したと考えられる。

ログ分析を補完するために, 本サービスの利用者に対して **Web** ベースの質問紙調査(192 名中有効回答 77 名)を行った。附属図書館ホームページの利用目的, 満足度についてそれぞれ質問したところ, **MetaLib** を利用目的に挙げている人は 12.9%と少なかった。支援ツールの満足度では, **MetaLib**12.9%, **SFX**25.7%と満足と回答している人は少なかった。また支援ツールの不満について質問したところ, “分からない”と回答した利用者は **MetaLib**48.6%, **SFX**42.9%と高く, 認知度が低いことが明らかになった。

横断検索/**SFX** についてより深く分析するために, それらに対する不満等について質問した。横断検索に対する回答では, “使ったことがな

い“以外の回答では, “検索結果が表示されるまで時間がかかる”23.1%, “検索結果の表示が分かりにくい”17.6%が比較的高く, 検索結果の表示に関する不満が高いと言える。

SFX に対する回答では, “フルテキストへのリンクから, 実際にたどれないことがある”23.6%, “表示される選択肢が多く, 分かりづらい”18.0%が高く, フルテキストの出現率に問題を感じている利用者が多いようである。

5. 結論

リモートアクセスシステムの利用者の多くが **SFX/ MetaLib** ともにあまり利用していないことが分かった。また支援ツール自体が認知されていないことが分かり, 現状では **SFX/ MetaLib** ともに有効性は低く, 利用者の情報探索行動を十分に支援しているとは言い難い。

しかしながら横断検索システムに対するニーズは高く, 今後, 学術的な情報探索行動の主要なアクセス経路の 1 つになりうるだろう。**SFX** は, フルテキスト論文へのアクセス支援という本来の目的では利用されず, むしろフルテキストが存在しない場合の代替手段として, また **MetaLib** などのリゾルバー機能が弱い **EJ/DB** の補完機能として利用されていることが分かった。

[1]宇陀則彦, 伊藤宏美, 松村敦「アクセスログに見る電子図書館利用の傾向」情報知識学会誌.2008, Vol.18, No.2, p161-168

[2]COUNTER project

<http://www.projectcounter.org/>

